

気仙沼における東洋大学学生ボランティアセンター の支援活動 その2

子 島 進*

はじめに

筆者は、『国際地域学研究』18号において、東洋大学学生ボランティアセンター（以下、学ボラ）によるボランティア活動を取り上げた（子島・須永 2015）。この学生サークルの活動内容は多彩であり、焦点を当てたのは宮城県気仙沼市における被災地支援活動である。東日本大震災から3年が経過した時点で、気仙沼での活動を振り返り、その意義や成果、そして課題を確かめることが趣旨であった。

本稿はその続編である。先の論文では、気仙沼の関係者へのインタビューが手つかずであった。筆者は、2015年8月24日から27日にかけて気仙沼を訪れ、学ボラの主要な受け入れ先でインタビュー調査を行った。この作業を通して、東洋大生による活動の意義、苦勞している点、そして地域住民の期待などが浮かび上がってきた。

今回、お話を聞いたのは次の6名の方々である。

小野寺克弘：東洋大学法学部経営法学科を卒業。学ボラの活動を大学広報で知った小野寺さんが東洋大に連絡をしてきたことがきっかけとなり、学ボラの気仙沼での活動はさまざまな方面に広がることとなった。

佐藤健治：気仙沼市議会議員。知り合いの小野寺さんから連絡を受け、学生ボランティアの宿泊先やボランティア先の確保に尽力する。

里見栄美：おひさま保育園理事長。前身の南気仙沼幼稚園（南郷地区）は津波に流され、当時理事長を務めていた叔母を亡くしている。多くの保護者から要請を受け、新たにおひさま保育園を立ち上げる。佐藤健治さん（子供が南気仙沼幼稚園の卒園生）から学ボラを紹介される。

熊谷美由紀：気仙沼小学校学童保育の主任指導員。2009年から南気仙沼小学校の学童保育で勤務していたが、同小は津波で1階が水没した。その後、南小は気仙沼小に間借りしていたが、2012年3月に統合。佐藤健治さん（子供が九条小の学童を利用）から学ボラを紹介される。

* 東洋大学国際地域学部：Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

佐藤由美子：社会福祉法人キングス・ガーデン宮城事務長。キングスガーデンは、ケアハウス、グループホーム、特別養護老人ホーム、障害者支援施設等を市内各地に有している（なお、キングスガーデンは全国各地で事業を展開しており、筆者の両親も亡くなるまでの十年余をキングス・ガーデン埼玉で暮らしていた）。東日本大震災の当時、気仙沼湾に近いキングス・タウン（三日町にある特別養護老人ホーム）は浸水を免れたことから、救援の最前線となっていた。この時、小野寺さんは給水や避難者の受け入れ活動にボランティアとして参加した。佐藤由美子さんは、小野寺さんから学ボラの紹介を受けている。

福岡麻子：一般社団法人気仙沼復興協会（KRA）の環境保全部職員。KRAは次の2点を目的として、2011年4月に設立されている。

- ・東日本大震災により仕事を失われた方々に早急に仕事を確保し、雇用を促進すること
- ・被災者自身の手により、宮城県気仙沼地域における復旧・復興を行うこと

KRAは、気仙沼内外からやって来るボランティアを受け入れ、海岸清掃、公共の場の清掃、イベント支援など多岐にわたる仕事のマッチングを行っている。

1. 2013年夏休み以降の支援活動

参加メンバーは「クール」に編成され、集団で行動する。学ボラの復興支援班のメンバーを中心に、サークルに属さない東洋大生も参加している。2013年夏休みには、8月17日から9月3日までの間に、4クールが活動した。筆者が訪問した際の第2クールは6名で構成されていた。

4泊6日のクールの流れは次のとおりである。白山キャンパスから夜行バスで気仙沼に向かい、翌朝から活動を開始する。4日間フルに活動し、次のクールのメンバーが乗ってきたバスで東京に戻る。一日の大まかな流れは、午前6時に起床し、7時に朝食。活動先に到着する時間は、8時半から10時ごろまでとばらつきがある。活動終了の時間も午後3時から6時と一様ではない。作業終了後に町の銭湯で入浴し（自治会館には風呂はない）、夕飯の買い出しをする。午後7時には夕食をすませ、9時からミーティングである。このときに、その日の活動の詳細を互いに報告し、翌日以降に注意すべき点を確認する。そして、10時半に消灯。自治会館の広間に全員で雑魚寝である。

以下に、2013年夏休み以降の学ボラの活動を箇条書きにしてある。なお、この部分の情報をまとめてくれたのは、学ボラの復興支援班班長の松村慶太郎さん（文学部哲学科2年）である。

1-1 2013年夏休み

KRA

- ・お伊勢浜海岸の清掃
- ・小泉海岸の清掃
- ・蔵内漁港でホヤ養殖いかだのおもりに使う砂袋作り
- ・慰霊碑周辺の花壇の整備

- ・東みなと町にある公園の除草作業
(天気が悪い日には、作業の代わりに座談会を実施)。

キングス・ビレッジ面瀬ランチ (高齢者専用シェアハウス。津波で流出した幸町の障害者就労支援施設もこちらで再開)

- ・コースター作り
- ・布海苔の選別作業
- ・タオルの箱詰め
- ・寒天の仕分け
- ・花屋の手伝い
- ・免許の申請書にシールを貼る作業

おひさま保育園

- ・園内清掃と保育補助

気仙沼小学校

- ・学童保育

このほかに、2013年夏には、以下のようなイベントにも参加している。

- ・仮設住宅で気仙沼ホルモンの炊き出し (気仙沼ホルモン同好会とドリームクラブが主催)
- ・気仙沼フェニックスバッシングセンター建設の手伝い
- ・ソフトバレーボール大会の手伝いと参加 (三陸新報主催)
- ・テニス教室 (ラブオール)
- ・名古屋学院大学との交流
- ・みなとまつり
- ・九条小学校でお祭りの手伝い

1-2 2014年春休み

KRA

- ・九田丸海岸で清掃
- ・お伊勢浜海岸で清掃
- ・ゴミの仕分け
- ・封筒に広告を詰める作業
- ・気仙沼向洋高校にて瓦礫の撤去
- ・大谷幼稚園にて、図書整理
- ・仮設住宅で雪かき作業

キングス・ビレッジ面瀬ランチ

- ・キャラクターのお菓子の箱の組み立て作業
- ・キャラクターのファイル詰め作業
- ・寒天を細かくする作業

おひさま保育園

- ・園内清掃と保育保助

気仙沼小学校

- ・学童保育

このほかに、2014年春には、以下のようなイベントにも参加している。

- ・元気！！ご当地グルメマーケットの手伝い（テント張りや交通整備、ゆるキャラの手伝い、イベント補助全般とイベント協賛）
- ・わくわくサークル

九条小学校でのイベントである。東洋大学の以下のサークルの協力のもと実施（アカペラサークル hum、阿波踊り愛好会、大道芸サークル Pastime、手話サークルつみき、マジシャンズソサエティー）。それぞれのパフォーマンスを小学生に見せた後、大学生と小学生と一緒に練習。最後に成果を披露する。

- ・スケート教室の手伝い（千厩アイスアリーナ）
- ・ともしび工房建設の手伝い
- ・3.11 追悼式の参加
- ・仮設住宅で炊き出し
- ・神戸学院大学との座談会
- ・ソフトバレーボール大会（気仙沼ソフトバレーボール協会主催）
- ・気仙沼ユネスコ協会新春交流パーティーへの参加

1-3 2014年夏休み

KRA

- ・お伊勢浜海岸でゴミの分別作業
- ・小泉海岸で清掃

キングス・ビレッジ

- ・寒天作り

おひさま保育園

- ・園内清掃と保育保助

気仙沼小学校

- ・学童保育

このほかに、2014年夏には、以下のようなイベントにも参加している。

- ・仮設住宅での炊き出し
- ・ソフトバレーボール大会に選手兼運営スタッフとして参加（三陸新報主催）
- ・味処塩田の引越しの手伝い
- ・さかなの駅で行われたお祭りのお手伝い
- ・みなとまつり

1-4 2015年春休み

キングス・ビレッジ面瀬ランチ

- ・商品のシール貼りと包装
- ・ワカメの選別、袋詰め

K R A

- ・アルバム、地図、写真の洗浄
- ・海岸清掃

おひさま保育園

- ・園内清掃と保育保助

気仙沼小学校

- ・学童保育

このほかに、2015年春には、以下のようなイベントにも参加している。

- ・カノンアンサンブル音楽隊による演奏と南郷交流会（南郷地区自治会主催）
- ・スケート教室（千厩アイスアリーナ）
- ・みなとまつり

このように箇条書きにしてみると、無味乾燥になってしまうが、活動の現場をのぞいて見ると、体力も気遣いも要求される密度の濃い作業が多いように感じられた。そして、学ボラが多様なボランティア活動を継続してきたことは、気仙沼の関係者から高い評価を受けている。学生の真摯な姿勢と、4年間にわたって継続してきたことに対する評価である。

もちろん、大勢のボランティアの中には、態度のよくない者も時に混じっていたようで、「かなり厳しく叱りつけましたよ」との声もあった。実際、相手の要求する水準を満たせず、ボランティアの依頼が来なくなってしまうところもある。2015年夏の参加者に関しては「安心して仕事を任せられます」というコメントをいただいたことを付言しておきたい。

2 関係者からのコメント

この章では、先に挙げた受け入れ先の関係者による学ボラへのコメントを紹介したい。要求が高すぎるように感じられる部分があるかもしれないが、決して上から目線の批判ではない。51才の筆者は、学生時代にボランティアをしようなどとは思いつかなかったし、実際何もしなかった。その世代から見ると、学生たちが自然にボランティアに励む姿は素晴らしいと思うし、それは気仙沼の方々も同様であろう。これまでの継続があってこそこの「さらなる期待」なのである。

まず、気仙沼到着後の8月24日夕方、佐藤健治さんからお話をうかがった。場所は、学生たちの宿泊先である田中一区自治会館である。佐藤さんの自宅はそのすぐ近くにある。

2-1 佐藤健治

東洋大のボランティアが、なぜ今まで活動が続いているのか？ 学生たちは「気仙沼の人はあたたかい」と言ってくれる。「あたたかさ」がキーワード。

とは言え、自治会館での集団生活は、慣れない学生たちにはたいへんだろう。灯油ストーブや汲み取り式トイレ、料理など、初めて経験することばかり。火事になりそうになったり、トイレが溢れたり、私も何回も怒りました。でもボランティアも大事だが、自治会館での集団生活も、今の学生にとってはいい経験になっているのではないか。

注文をつけるとすれば、学生には4年間の町の変化を見てほしい。学生は見ているのだろうか？ 町が変化するにつれ、支援のあり方も変わってきている。

1期 インフラ（がれき撤去）

2期 心のケア

3期 風化させない

東京の人たちに被災地のことを思い出してもらうことも、ボランティアの果たす大切な役目であり、これからは、「つなげていくボランティア」へとシフトしてもらいたい。そういう意味では、2011年夏休みに会ったリーダーの幅野が印象に残っている。彼はクールごとの活動が途切れないように、重要な情報を後から来る学生につないでいた。幅野はときどき大学に行って、最初の行動や思いを、後輩たちに伝えるべきだ。

翌8月25日午前中に、おひさま保育園をたずねた。同園の前身は南気仙沼幼稚園である。30年の歴史があり、120名の子供たちが在籍していた。3月11日、職員や園児は近くの南気仙沼小学校に避難した。同小にも津波は押し寄せ、1階の天井まで浸水した。全員3階に避難して無事だったが、園は津波に飲まれ、出先から園児の無事を確認しに戻った小松セイ子理事長は亡くなった。

2-2 里見栄美さん

この保育園では、子供がどんどん増えて、40名の予定が現在80名です。その理由は、おひさまが「認可外」で、親が就業していなくても（津波で職場が流されて求職活動中でも）、随時入園できる園としてスタートしたからです。ここは言ってみれば、気仙沼での最後の受け入れ先です。実際、気仙沼には待機児童がいません。「認可」されれば助成金をもらえますが、入れなくなる子供

が出ます。

津波に対する親の安心感も大切です。今の場所（茗荷沢）は立地的に津波の心配のない、安心できる所です。唐桑や本吉といった遠い所からも預けに来ています。なんで遠い所から来るのかというと、市内で勤務する親御さんは仕事の始まりと開園時間があうので、都合がいいんです（近所の園だと、出勤する時にはまだ開いていない）。

資格を持った職員が5名、資格のない職員3名の8名で80名の子供たちの面倒を見ていますが、常に人員不足です。平均年齢も高いので、子供たちと一緒に走り回るのも無理がある。若い大学生が来てくれることには本当に感謝しています。

多くの場合、初めて幼児と接するので、学生にも不安があるだろうと思います。でも子供たちが歓迎するので、一日過ごすうちに「また来たい」となって、実際にリピートしてくれます。しかし、心構えは必要です。安易な気持ちで子供に接する学生には厳しく言います。リーダーの松村さんも、最初に来たときは私に相当怒られました。でも彼はめげずにやって、成長したと思います。

ボランティアにはいろいろな方が来てくれます。東京や関西、広島など遠方から「読み聞かせ」や「パネルシアター」のボランティアが来てくれることもあります。大学生のボランティアも多いですが、唯一継続してくれているのが東洋大です。

東洋大生には、自分が今向き合っている子供の家族のこと、あるいは被災した地域の現状にもう少し目を向けてもらえればと思います。この子のお父さんやお母さんは、今どんな仕事をしているんだろうと関心を持ってもらい、それを東京に帰った時に、周囲の人に伝えてもらえるとうれしいですね。

被災地の応援にはいろいろあります。物の応援もありますが、常に寄り添ってくれる応援が大切です。東洋大生には、これからも来てほしいです。

気仙沼の情報誌『浜らいん』の2012年11月号（里見2012）には、里見さんのインタビュー記事が掲載されている。それは、叔母である理事長の死後、保育園を新たに立ち上げる奮闘記となっている。気仙沼を訪れる学生にはぜひ読んでもらいたい。

25日午後、気仙沼小学校をたずねた（先に記した通り、被災した南気仙沼小学校は気仙沼小学校に統合されている。南小の跡地には、大きな災害公営住宅が新設された）。おひさま保育園のある茗荷沢から歩いて大川を越える。川沿いに少し歩いた後、かなり急な山道を抜けると、とても広い校庭のある小学校に到着する。その一角に、ユニセフから寄贈された学童保育の新しい建物はあ

2-3 熊谷美由紀

3月11日の地震の後には400人くらいが南小に避難していました。津波で1階が水没し、3階に取り残されました。12日に自衛隊の車両でK-WAVE（赤岩牧沢にある総合体育館）に移動しました。

東洋大生の学童保育でのボランティアは、2012年春休みに九条小で始まりしました。小泉さんや幅野さんがいました。自分たちも被災者なので、揺れたりすると子供たちと一緒に怖がってしまう。そんなとき、学生たちが落ち着いていてくれるとありがたいんです。今では子供たちが震災の

体験を話すほど、大学生と親しくなっています。これからも「こんにちはー」とやって来て、一緒に遊べる場所にしたい。

積極的に最初から楽しんでいる学生もいる一方、しかたなく来ているように見える学生もいます。疲れてここで寝てしまった人もいました。私自身がゆるいので、あまり気にはしませんが(笑)。

学生さんには、無理強いしませんが、継続する意味は何なのかを考えてみてほしい。そうすれば、この行動がどこかにつながっていくと思います。

この日は夕方には、さらに小野寺克弘さんにお会いした。場所は自治会館である。

2-4 小野寺克弘

地元の気仙沼高校を卒業後、1993年に法学部の経営法学科に入学しました。在学中はサウンドシティという音楽サークルに入っていました。ボランティアをしたことはありませんでした。ただ、小学校から中学にかけて「海浜学校」に参加していました。気仙沼ユネスコ協会が主催する大島での2泊3日の体験学習です。高校生のときに、そのリーダーをしました。この行事にキングスガーデンも関わっていたので、震災の時にボランティアをすることになりました。

1997年の卒業後は、10年ほど東京の人材派遣会社で働いていました。35才のころ、長男ということもあり気仙沼に戻りました。広告代理店、港市場、そして現在は魚市場で働いています。3月11日は、港市場の近くのオフィスで仕事をしていました。

小野寺さんの震災後の活動は、「市民に愛される『気仙沼ホルモン』の普及」(2012年度 File 22)として、三菱商事復興支援財団のHPに詳しく紹介されている(同じページには、佐藤健治さんも登場する)。以下に、その一部を抜粋して紹介したい。

当初は写真展開催と気仙沼ホルモンの普及が、別々のメンバーによって動き出しましたが、「気仙沼復興支援グループ」を組織し、今は共同で実施しています。小野寺克弘代表は、「全国からの応援は、復興していくための原動力になります。震災が風化しないよう、まずは写真展を開催することを考えました。また気仙沼は、漁業の町。水産加工を普及させることが一番ですが、復興への条件が整うまでには時間がかかります。今すぐ始められることは何かということで、気仙沼市民にとってのソウルフードとも言える『気仙沼ホルモン』で町の復興をしようと考えました」と話します。

写真展は、広島や尾道、島根の浜田、千葉の八千代や君津、埼玉の行田など全国で開かれ、また韓国でも行われました。大学祭から依頼がくることもあるそうです。昨年は震災直後の写真100点あまりを展示していましたが、今年に入り「復興の状態を知りたい」と、同じ場所の現在の様子を撮影した写真をリクエストされることも増えてきたと言います(三菱商事復興支援財団HP)。

また、気仙沼ホルモン同好会HP上の傑作ビデオ「秘密結社「豚の穴」」で小野寺さんの姿を確認することができる。気仙沼を支える熱い男たちが踊る姿は必見である。

学ボラに関しては、中越地震の際に支援した山古志村が原点なのだから、常にそこに立ち返りつつことが重要だろうと考えている。学生が常に代替わりしていく中で、うまく初心を伝えていくことは簡単ではない。うまく引き継ぎをしていくには、リーダーの役割が大きいと指摘する。気仙沼においては、幅野・小泉の二人がやはり大きな存在だったと言う。小野寺さんは、震災の記憶が風化しないように写真展をまた都内でも開催したいと考えている。これまで気仙沼に関わった卒業生を巻き込む形で企画を進められれば、学ボラの可能性を広げていくことにもつながるかもしれない。

8月26日は、朝一番に三日町のキングス・タウンでお話をうかがった後、キングス・ビレッジ面瀬ランチに移動した。ここは学生たちが障害をもつ方々と一緒に作業をしている場所である。施設内の作業を見学した後、近くの工場で行われている「さんまを梱包する箱の組み立て作業」にも足を運んだ。

2-5 佐藤由美子

今回の震災で気付いたのは、気仙沼が「若者のいない町」になっていたということ。地元にはボランティアをする若者がいない。頼りにしたのは40代で、その一人が小野寺さんだった。コミュニティの成り立ちとして、どの世代も切れてはいけない。今回、欠落していた部分を、いろいろな大学の学生が来て埋めてくれた。子供たちの遊び相手としても、若者が欲しい。

3年4年と経つにつれ、「ボランティアのために作業を作らないといけない」という強迫観念に囚われるようになってはいないだろうか。そこは地域の人たちも再考の余地がある。送る側を遠慮させてはいけない。緊急救援から瓦礫の撤去と進んできて、一緒に考えていく、何かを一緒に生み出していく時期に来ている。東洋大生にも、町づくりのプロジェクトに参加してほしい。

佐藤由美子さんは、実際に進行中の「松岩地区復興まちづくりプロジェクト」の提案書を見せてくれた。これは津波の跡地の有効利用を、気仙沼内外の市民と一緒に考えようというものである。9月には、オランダやオーストラリアの災害復興や建築の専門家を交えてワークショップを開催することになっており、東洋大生にもこうした集まりでの積極的な発言を期待するとのことであった。

キングス・ビレッジから長磯船原にあるKRAへ、車で送っていただく。気仙沼線の陸前階上駅にほど近い場所である。

2-6 福岡麻子

KRAは、これまで多くの大学の学生と一緒にボランティア活動を行ってきました。2012年度にボランティアに来てくれたのは、関東や関西を中心に12校です。現在も継続しているのは、東洋大に加えて、東京国際大、東北学院大です。

仕事の割り当ては、特に配慮していません。その時にあるものをお願いします。100人以上の大人数になると、清掃になります。仮設住宅は90か所あり、点在しているので少人数で行っても大

丈夫です。スポーツをしたり、コミュニティ麻雀をしたりします（コミュニティ麻雀は、通常の麻雀牌の20倍もある巨大な牌を使い、2人1チームでゲームをする。お金は賭けない）。震災の体験は、外から来た人にこそ話せるという面もあります。

私たちは、震災を伝えることも大切にしています。ビデオを見てもらったり、慰霊碑を訪問したりしています。続けて来ている東洋大にこそ、毎年の変化を伝えてほしい。学園祭で発表したり、冊子を作成したりといったことができると思います。そのためにも作業の合間に町の様子をよく見てほしい。宿泊所からここに来る時も、たまにはBRTに乗ってみると、復興の様子がよくわかるはずです。

帰りに、早速BRTを試してみる。バス・ラピッド・トランジット（Bus Rapid Transit）は、バスレーンを用いてバスの優先運行を図るシステムである。気仙沼線は、2012年よりバス専用道路に改められている。バスになって本数は増えたようであるし、渋滞もないので定刻に来る。快適な走りである。津波で地形が大きく変わってしまった部分はまだ不通であり、その区間は一般道路を走行する。たしかにBRTに乗っていれば、沿岸部の復旧の様子はよくわかるだろう。

おわりに

気仙沼の関係者のみなさんのコメントは、「地域のことをもっと見て、変化を伝えてほしい」という点に集約される。これは偶然の一致ではないだろう。町は変化していく。ボランティアもまた、気仙沼の人々との関係性の中で、自分たちの立ち位置を見定めていく必要がある。活動内容の不断の確認が求められている。確認した結果、これまでやってきたことが今後も必要だと思えばつづけなければならないだろう。もし、何か新しいことに取り組む時期にあると考えるのならば、もう一度試行錯誤してみることも意味があるだろう。

[引用文献]

里見栄美 2012 「おひさまのような笑顔で」『浜らいん』11月号、6、7ページ（インタビュー）。

子島進・須永晃代 2015 「気仙沼における東洋大学学生ボランティアセンターの支援活動」『国際地域学研究』18号、3 - 13ページ。

[HP]

気仙沼ホルモン同好会 <http://www.horumone.jp/>

三菱商事復興支援財団「市民に愛される『気仙沼ホルモン』の普及」<https://mitsubishicorp-foundation.org/reconstruction/case/file22.html>

Toyo University Student Volunteer Center's Activities in Kesenuma, Miyagi Prefecture Part 2

Susumu NEJIMA

Toyo University Student Volunteer Center has been actively working as a student voluntary organization for the last ten years. When Tohoku Earthquake and Tsunami occurred on March 2011, they began volunteer activities in Kesenuma, Miyagi Prefecture. Based on interviews to local leaders who work with the students, this paper describes their operations up to March, 2015.

Keywords : Tohoku Earthquake and Tsunami, Kesenuma City, Gakubora (Toyo University Student Volunteer Center)